

2008年3月、東京オペラシティ・リサイタルホールにおける初リサイタルをライブ収録したという当盤からは、技術と高い音楽性と言いつくを取つてもすでに高水準に達した「ハープの音楽」を味わうことができる。J・S・バッハに始まり、クルシエネク(註：ディスクでの表記はクレネク、アメリカに帰化した人なので実際はこう呼ばれているかもしれないが、やはりこう書きたくなる)、トゥルニエからド・ラ・ブレール、ルーセル、シュー(註：台湾の作曲家で、ここに聴く《幻》は現代的手法を用いた新作)、ムチエデロフ、プロコフィエフと、なんらかの意味でハープにとり意義ある作品を揃えたプログラムも興味ぶかい。バッハの《バルティータ》第1番を聴きながら思うのは、かねがねハープ演奏がおもしろいからだ。余韻の氾濫を巧みに抑え、透明度の高い演奏を若いハープリストが展開していること。ただし、明確さの半面、ハープ本来の魅力である潤いにも欠けていない演奏であることは、トゥルニエの《ソナチネ》や、CDの表題曲になつているド・ラ・ブレールの作品からよくわかる。この1枚は必ずや、これから日本を代表するハープリストとして活躍するであろう人の、首途を記念するものとして俾はれよう。

那須田務 ● *Takumu Nasuda*

● 準 昨年3月に東京オペラシティのリサイタルホールで行なわれたコンサートのライブ録音だという。バッハやトゥルニエ、プロコフィエフや現代作品までを並べた意欲作。バッハのチェンバロの響きに似た印象は想像通り。もちろん、同じように弦を弾くとはいっても、こちらは人間の指、柔らかな倍音を一杯に含んだ音色はハープならではの。そのフレリユードに一箇所音程に苦しいところがある。編集なしのライブ録音の難しさである。でも、デビュー・アルバムにコンサートのライブを選んだ勇氣もさることながら、技術的な完成度の高さは敬服に値する。クルシエネクのソナタは力強いタッチで思い切りがいい。第2楽章は調性音楽ではない抽象

的な音楽で、とてもよく弾いていると思うのだが、何か物足りない。トゥルニエの《ソナチネ》第1番は率直な表現でハープと同曲の魅力がよく出ている。終楽章は思い切りのよい大きな音楽が快く、こんなところに彼女の生来の優れた音楽的資質を感じさせる。シューの《幻》は2006年の作品。特殊奏法によって幻想的なサウンドを作り出しているのだが、平野は実に新鮮な感興に満ちた演奏を聴かせている。ド・ラ・ブレールの《雨に濡れた庭》は迷いのない純度の高い表現が快いが、レニエの詩から連想される何か加わると、もっと味わいの深い演奏になるに違いない。クルシエネクの緩徐楽章もそうだが、こうしたプラス・アルファが何なのか筆者には分からない。きっと彼女が音楽家としての経験を積むことで醸し出されてくるものなのだろう。期待したい。

神崎一雄 ● *Kazuo Kanazaki*

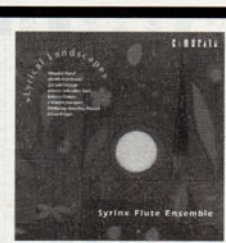
● 「録音評」 ステージ上の演奏を、あくまでも自然に捉えた収録と言えよう。心持ち演奏に迫ったところもあり、近・現代曲の「が」での迫力をも十分に伝えてくる。空間の響きを適度に収めて、爪が弦に当たるシャリシャリとした硬質な音を抑えた収録であり、これが全体に当たりの柔らかいステイジ的なリサイタルをも醸し出している。

2008年3月4日、東京オペラシティ・リサイタルホールで満川隆、池田高史の収録。 (90、93)

新譜月評 The Record Geijutsu 器楽曲

● リリカル・ランドスケープ

● 準 個人的な話で申し訳ないが、元来フルートだけのアンサンブルというのは苦手だ。サウンドが単調で表現に乏しく、長い間聴いていられないのがその理由だが、このディスクは例外だ。最初に《クーブランの墓》から4曲が選ばれて



【ラヴェル《クーブランの墓》より/クトノフスキ:フルート・アンサンブルのためのインテルメツォ/大前哲:リリカル・ランドスケープ/ジャヌカン:恋の手習い、他(全14曲)】
【詳細は巻末新譜一覧表参照】
持田洋(指揮、fl)シリンクス・フルート・アンサンブル
【カメラータ©CMCD28172】 ¥2940

いるのだが、たくさんの様々なフルートの音色が合わさって醸しだされる音色は印象派の絵画のように多彩で陰影とクラクションに富む。同時に、ピッコロの飄々とした鋭い響きに雅楽の笛のような味わいがある。そんなところがやっぱり日本のアンサンブルなんだと思う。(フオルラーヌ)の軽やかなリズムがすてきた。フルートはほとんどの息が外に出てしまう効率の悪い楽器だが、昨今のマイクは感度がいいからか、外に出た空気の音までもよく拾う。この空気の音も含めてフルート・アンサンブルなのだろうし、それも表現の一つになつているとはいえる。(介ゴードン)では各楽器の多様な音色と程よく強調されたリズムが相俟って、東洋のエキゾティシズムが感じられる点も面白い。(ヘヌエット)も「フオルラーヌ」と同様に柔らかなリズムとサウンドが聴き手を夢心地の境地へと誘う。この種のアンサンブルにありがちな二元的に音色や表現を揃えてしまうことなく、個々の奏者の個性を生かし、積極的に自発的な演奏が快い。大前哲のタイトル曲《リリカル・ランドスケープ》はまさしく日本の雅楽風の色彩と情念を持った作品で、水を得た魚のような自在な演奏を聴かせている。

三井 啓 ● *Akira Mizuki*

● 「録音評」 2008年7月、神戸新聞松方ホールで録音。自然で、豊かな響きをともなつてフルート・アンサンブルが厚い、美しいサウンドを展開。ホールの響きのすば

……らしさに負うところが大きい。

〈90、93〉

ティックな情感を盛り込んでいる。チェスター大聖堂のオルガンは19世紀のもの(詳細は同大聖堂のホームページに詳し

もとでウェアリーズやシェフェールの作品研究を行ない、さらに小泉文夫のセミなどを通じてヨーロッパ内外の音楽に目覚